

[原著論文：査読付]

## 小学生を対象に活動するアスレティックトレーナーに求められる役割： サッカースクールにおける検討

辰見 康剛<sup>1)</sup>， 薦田 陽月<sup>2)</sup>， 住田 早祐<sup>3)</sup>， 久保 誠司<sup>1)</sup>，  
西山 侑汰<sup>1)</sup>， 名頭蘭 亮太<sup>1)</sup>， 国枝 結花<sup>1)</sup>

### The Roles Required of Athletic Trainer Working for Elementary School-Age Children: A Study in Soccer Schools

Yasutaka TATSUMI<sup>1)</sup>， Hizuki KOMODA<sup>2)</sup>， Sasuke SUMIDA<sup>3)</sup>， Seiji KUBO<sup>1)</sup>，  
Yuta NISHIYAMA<sup>1)</sup>， Ryota MYOTSUZONO<sup>1)</sup>， Yuika KUNIEDA<sup>1)</sup>

#### Abstract

The purpose of this study was to examine the role of JSPO-AT who work with elementary school-age children. To this end, we conducted a semi-structured interview survey with three trainers who worked with elementary school-age children and four trainers who worked with university students, after asking them to recall the activities they performed in their respective fields. The results suggested that elementary school-age children are more likely to have poorer self-management skills than university students, and therefore that risk management to prevent sports injuries and disorders requires a detailed perspective on each individual athlete. In addition, it was predicted that in order to carry out more effective activities within a limited time, not only knowledge and skills but also communication skills appropriate to the target audience are required. Therefore, it was considered effective to obtain understanding and cooperation not only from the trainer themselves, but also from coaches and parents. In addition, it was suggested that in elementary school-age children, not only specialized instruction in medical conditioning is required, but also instruction and behavior as a sports instructor is sometimes required. This study provided useful suggestions for carrying out trainer activities with elementary school students. However, the target subjects in this study were limited, and it is difficult to say that it covered a wide range of trainer activities for elementary school-age children. In the future, it is necessary to set up a wider target audience and accumulate more knowledge.

**KEY WORDS :** JSPO-AT, Junior Sports, Semi-structured interview

---

1) 九州共立大学スポーツ学部  
2) WAFA鍼灸整骨院  
3) フリーランス

1) Faculty of Sports Science, Kyushu Kyoritsu University  
2) WAFA Acupuncture and Osteopathy Clinic  
3) Freelancer

## 1. 緒言

近年、年齢や技能レベルなど、異なる対象に応じたスポーツ指導が求められている<sup>1)</sup>。その中でも特に小学生は、プレ・ゴールデンエイジ（5・6歳～8歳）やゴールデンエイジ（9歳～12歳）に該当する時期であり<sup>2)</sup>、この時期における適切なスポーツ指導は、将来のスポーツ技能の向上のみならず、子どもの体力・運動能力の2極化が著しい我が国において重要である<sup>3, 4)</sup>。

日本スポーツ協会公認スポーツ指導者資格のひとつであるアスレティックトレーナー（以下、JSPO-AT）に目を向けると、7つの役割が定義されており（Table 1）<sup>5)</sup>、それぞれについて詳細に記されている<sup>6)</sup>。しかし、異なる対象に応じた記載はほとんど見当たらず、小学生に対する役割については触れられていない。また、先行研究においても小学生に対するJSPO-ATの活動報告や役割の検討はほとんど行われていない。前述の通り、異なる対象に応じたスポーツ指導が求められていることに鑑みると、小学生を対象に活動するJSPO-ATの役割を検討することが必要であると考えられた。

以上から、本研究では他の年代と比較した上で小学生を対象に活動するJSPO-ATの役割を検討することとした。具体的には、小学生と大学生を対象としたトレーナー活動を比較・検討し、特に小学生を対象に活

動するJSPO-ATに求められる役割を提示することとした。本研究から得られる知見は、小学生を対象にトレーナー活動を実施する際の一助になると考えられる。

## 2. 方法

### 1) 時期と対象

調査は2021年9月から2022年7月に行った。小学生を対象として活動したトレーナーは、サッカーJリーグに加盟する同一クラブの異なる3つの下部組織スクール（以下、サッカースクール）、それぞれで1年間以上活動した3名であった（以下、小学生群：事例A～C）。また、大学生を対象として活動したトレーナーは、A大学体育会クラブで2年間以上活動した4名であった（以下、大学生群：事例D～G）。7名のいずれもJSPO-AT適応コース承認校である4年制大学に在籍し、JSPO-ATの資格取得を目指す学生であった。

サッカースクールは、10以上の地域で開校されており、学年や性別、競技レベル別に複数のクラスから構成されていた。なお、本研究では小学校1～6年生で編成されるクラスを対象としたトレーナー活動のみを対象とした。Table 2に各事例の基本情報とトレーナー活動先の詳細を示した。

Table 1. 日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナーの役割<sup>5)</sup>

1. スポーツ外傷・障害の予防
2. スポーツ現場における救急処置
3. アスレティックリハビリテーション
4. コンディショニング
5. 測定と評価
6. 健康管理と組織運営
7. 教育的指導

Table 2. 各事例の基本情報とトレーナー活動先の情報

		活動期間	活動頻度	活動先	活動先の情報
小学生に対する トレーナー	事例A (3年生、女性)	1年間	週1回	サッカースクール	約35名の選手が所属。基本的な技術を有する小学生を対象に、より高いレベルの技術・戦術を身につけることを目的としたクラス。
	事例B (3年生、男性)	1年間	週1回	サッカースクール	約40名の選手が所属。運動の基礎やコーディネーション能力を養うトレーニングを行い、ミニゲームで体力、技術、フェアプレーの精神を身につけることを目的としたクラス。
	事例C (3年生、男性)	1年間	週1回	サッカースクール	約40名の選手が所属。運動の基礎やコーディネーション能力を養うトレーニングを行い、ミニゲームで体力、技術、フェアプレーの精神を身につけることを目的としたクラス。
大学生に対する トレーナー	事例D (4年生、男性)	3年間	フルタイム	ラグビー部	約85名の選手が所属。主な成績として、地域リーグ（1部）優勝や全国大学選手権出場などがあり、競技レベルの高い選手が多数所属している。
	事例E (4年生、男性)	3年間	フルタイム	野球部	約215名の選手が所属。主な成績として、全日本大学野球選手権優勝などがあり、競技レベルの高い選手が多数所属している。
	事例F (4年生、女性)	3年間	フルタイム	水泳部	約40名の選手が所属。毎年、日本選手権や日本学生選手権に多数の選手が出場している。
	事例G (3年生、男性)	2年間	フルタイム	サッカー部	約130名の選手が所属。主な成績として、地域リーグ（1部）における上位進出などがある。

## 2) 調査方法

本研究では、各トレーナーがおかれている環境ならびに活動内容とプロセスなど、実際に起きた現象を詳細に理解する必要があった。そのため、数量的なデータを統計的に処理する量的研究ではなく、質的研究法を用いた。質的研究法とは、対象者の視点から見える事象ならびに他者との関わりなどを理解する場合<sup>7)</sup>や、数値で表せない現象の性質や特徴などを検討する際に有効な手法である<sup>8)</sup>。以上のことから、本調査では半構造化面接法によるインタビュー調査を実施した。具体的には、それぞれのフィールドにおける活動内容を想起してもらい、JSPO-ATの7つの役割に則した活動内容について尋ねた（例：スポーツ外傷・障害や内科的疾患の予防を目的とした活動を行なっていますか）。実施時間は1回あたり20分程度とし、対象者ごとに2～3回実施した。全ての調査はインタビュアー（研究実施者）と対象者の1対1で実施し、個室で行うなど、プライバシーの保護に留意した。なお、対象者の同意を得た上ですべての語りをiPhoneのボイスメモで録音した。

本調査は九州共立大学研究倫理委員会の承認を得た上で実施した（承認番号2021-13）。

## 3) 分析方法

はじめに全ての会話の内容から逐語録を作成した。続いて、JSPO-ATの7つの役割に関連深いと思われる語りやキーワードを探索・抽出した。次に小学生および大学生に対するトレーナー活動を比較・検討し、その相違点を結果と考察に用いた。

本分析はスポーツ心理学分野で本調査方法を用いて博士号を取得し、JSPO-ATとして20年以上の実践経験と10年以上の教育ならびに研究実績を有する者1名とJSPO-ATを目指しアスレティックトレーニング学を専攻する大学生2名の3名で行った。さらにその内容について、スポーツ社会学を専門とし同調査方法に精通している研究者1名と、JSPO-ATとして5年以上の実践経験および教育と研究実績を有する者3名を加えて確認を行った。

本研究では、異なる背景を有する対象者にインタビューを行い、複数名で分析を実施した。加えて、分析に携わっていない研究者による分析結果の確認と吟味を行い、トライアングレーション<sup>9)</sup>の視点を用了。以上により、本研究から得られる結果は一定の妥当性と信頼性を有するといえる。

## 3. 結果と考察

本項以降では、語りの部分を『』で示した。また、インタビュアーからの質問を“問”の後に記し、回答を“事例○”の後に記した。

### 1) スポーツ外傷・障害の予防

『問：スポーツ外傷・障害や内科的疾患の予防を目的とした活動を行なっていますか。』に対して、全ての対象者から実施しているという旨の回答が得られた。スポーツ外傷・障害や内科的疾患を予防するためには身体的・環境的・心因的の3つの因子に対するアプローチが必要である<sup>10)</sup>。そのため、2つ目以降の間では3つの因子について尋ねた。

身体的因子に対するアプローチの第1歩はメディカルチェックである<sup>10)</sup>。しかし、『問：スポーツ外傷・障害や内科的疾患の予防を目的に整形外科的および内科的メディカルチェックを行なったことはありますか。』に対して、小学生群からは『事例A：やってないです。』や『問：フィットネスチェックやその結果の分析を実施して、スポーツ外傷・障害の予防に役立てることはありますか。』に対して『事例B：ないです。』など、スポーツ外傷・障害の予防に向けたメディカルチェックは実施していないと語られた。一方で、大学生群からは『事例D：はい、整形外科的メディカルチェックとフィットネスチェックを定期的に行っています。』や『事例G：Tテストとかプロアジリティテストをやっています。それをリハビリ中の競技復帰前に行なって、受傷前と比較することで再発予防に役立てたりしています。』と語られた。以上の要因として、サッカースクールは週1回しか開校されておらず、メディカルチェックを実施するためには時間的な制約があることが示唆された。また、使用できる設備・用具の不足も考えられた。

環境的因子について、『問：環境的な面からスポーツ外傷・障害を予防するために行なっていることはありますか。』に対して、小学生群からは『事例A：とんぼをかけたり、石を拾ったり、靴紐のチェックとか結び方の声掛けをしています。』や『事例C：空気の入っていないボールを使わせないように声を掛けたりしますね（当該サッカースクールでは各自が持参したボールを練習で使用）。』と語られた。一方、大学生群は『事例D：ないことはないですけど、大学生なので給水とか環境に応じた服装とかは自分で調節してもらっています。』や『事例F：部で管理している用具の

点検は日頃からしています。あと、トレーニングルームにサーキュレーターを置いて室内の空気の循環をさせたりはしています。』など、比較的個別の介入をしていないことが示唆された。小学生は自己管理能力がまだ十分に育まれていないと予測される。そのため、小学生において環境的な視点からスポーツ外傷・障害を予防するためには、サーフェスなどの環境面だけではなく、靴紐のチェックなど一人ひとりに対する細かな視点も求められると示唆された。

心因的因子について、『問：バーンアウト症候群や摂食障害といった精神的ストレスが起因となりやすい疾患<sup>10)</sup>に対する予防はしていますか。』に対して、小学生群からは『事例A：してないです。』や『事例B：コンディションと疲労度は大雑把には聞いていましたけど、特にはないですね。』と語られた。また、大学生群においても『事例D：よく話しをしに来る選手で、ちょっと様子がおかしいなと思う選手に関しては気を付けるようにしますが、具体的にはあんまり…。』と語られた。以上のように、両群ともに積極的には心因的な視点から疾患を予防するための活動を実施していないことが示唆された。しかし、心因的因子により発症する疾患の予防には周囲からの支援が有効である<sup>11, 12)</sup>。そのため、対象年齢に関わらず心因的な視点からもトレーナーによるスポーツ外傷・障害ならびに疾患を予防するための活動が必要であるかもしれない。

## 2) スポーツ現場における救急処置

『問：スポーツ現場における救急処置として、実際に取り組まれた例があれば教えてください。』に対して、全ての対象者から急性外傷に対するRICE処置等の初期対応の実践例について語られた。その中で、小学生群からは『事例C：選手本人が痛い部位が分かっていたり、言っていることが変わることがありました。』や『事例B：ケガに対するリアクションが曖昧で分かりづらいため、応急処置の判断が難しいと感じます。もちろん、安全第一ですが、プレーを続行させても良いのではないかと思います。』他には『事例A：メンタル的な問題も多いので、トレーナーがケガの評価と応急処置をした後にコーチに伝えて一緒に判断しています。』と語られた。以上から、小学生のスポーツ現場において適切な救急処置を実践するためには、知識や技術だけではなく、負傷者に寄り添う姿勢や話しやすい環境づくりなど、対象に応じたコミュニケーション能力も求められると予測された。

大学生群からは、脳震盪と靱帯損傷が同じタイミン

グで発生したケースや、頭部の打撲、他には過呼吸の発生による救急車の要請など、緊急性の高い症例に対する対応例が語られた。一方、小学生群からは緊急性の高い症例に関しては語られなかった。この要因として、大学生と比べると小学生の方が運動強度が低く、重症外傷や疾患が発生しにくいためであると考えられた。なお、『問：緊急時対応計画の作成や活用はしていますか。』に対しては『事例A：心肺停止が起きた場合に誰が電話をかけるか、どこにAEDがあるのかといったことをコーチ達と確認しています。』や『事例F：救急車の誘導方法とか、どういう対応をするっていうマニュアルはあります。』他には『事例G：AEDの場所とか、救急車を呼んだときの案内ルートだったり、頸椎保護とかの資料をまとめてます。』など、両群から緊急時対応計画の作成ならびに活用している旨が語られた。以上から、小学生においては緊急性の高いスポーツ外傷や疾患が発生する可能性は低いと考えられるが、その中でも緊急時対応計画を作成し、大学生に対する活動と同様に万が一の事態に備えていることが窺えた。

## 3) アスレティックリハビリテーション

『問：アスレティックリハビリテーション（以下、アスリハ）について、実際に取り組まれていることを教えてください。』に対して、小学生群からは『事例C：特にはないんですよね。』など、アスリハを実施している旨のコメントは得られなかった。この要因として、サッカースクールではアスリハが必要となるようなスポーツ外傷・障害が発生しにくいためであると予測された。また、サッカースクールは週1回しか開校されていないため、次の練習機会までに多くのスポーツ外傷・障害が快方に向かいやすいためであると考えられた。一方、大学生群からは『事例D：基本的にはフィールドで行っているの、チューブとかメディシンボールを使った簡易的なメニューを行っています。あと、プラスして選手にリコンディショニングルーム（学内にあるリコンディショニングやアスリハを実施する施設：以下、RCR）、に行ってもらってフィールドじゃ出来ないことを補ってもらってるって感じです。』や『事例E：正直、キッチリは出来ていないですね。自分がピッチャーのランメニューとかを見ないといけないうことが多い。そういう時はRCRでみてもらうようにしています。』と語られた。その他には、医師や理学療法士ならびにJSPO-ATの管理のもと、医療機関でアスリハを実施しているケースも認められた。以上



のように、大学生群からは用具や人的環境の限界があるため周囲の施設との連携を測りながら、アスリハを実施している旨が語られた。

#### 4) コンディショニング

『問：コンディショニングとしては、どのような活動をされていますか。』に対して、小学生群からは『事例C：コンディショニングに当てはまるか分かりませんが、チーム全体のウォーミングアップとして練習の始めに少しだけ時間を取ってもらって、毎月メニューを変えながらコーディネーショントレーニングをしていました。疲労の回復というよりは協調性とかパフォーマンス向上を目的にしている感じです。』など、チーム全体に対して働きかけている様子が窺えた。また、『事例B：コンディションと疲労度は大雑把には聞いていましたけど、特にはないですね。』から、あまりコンディショニングそのものを意識した活動を実施していないことも予測された。一方、大学生群からは『事例G：ケガ人が多いので、練習終わりに“ストレッチしろよ”と選手に言うことが多いです。特に身体が硬い選手には必ず言うようにしています。あとは、選手が相談してきたら、それぞれに合ったメニューを用意して分かりやすく説明するよう心掛けています。』や『事例E：選手の数が多いので、練習前にセルフで行えるものを提供したりしています。』と語られた。他には、『事例D：ウエイトトレーニングだったり現状の体重について（中略）それぞれの目標とするところに合わせて、練習だけじゃなく、普段の生活の中でできることを話すようにしています。』や『事例F：ひとりひとり性格が違うので、いかに消極的な選手に声を掛けて促すか、みたいなことを意識してやっています。』など、小学生群の語りとは異なり、チーム全体に対する働き掛けよりも個別のアプローチに関する語りが多く得られた。サッカースクールは習い事という側面もあり、ほとんどの選手が保護者の送迎のもと、練習直前にグラウンドに来て、終了後すぐに帰宅をする。そのため、トレーナーと選手ならびに保護者が話をする機会が多いとはいえない。一方で大学生の部活動においては、練習前後も比較的時間が取れることが多く、さらにトレーナーも選手と同じ学生という立場であることから、競技活動場面以外でも時間を共有しやすい。そのため、サッカースクールと比較をすると大学生の部活動の方が、トレーナーと選手のコミュニケーションが図られやすく、コンディショニングにおいてトレーナーが個別に介入しやすいと示唆された。

その他、大学生群からコンディショニングの一手段としてテーピングに関する語りが得られた。『事例D：テーピングでケガの予防だったり、悪化を防ぐためのコンディショニングをしています。一応、選手の好みとかポジションの特性とかは考えますけど。』や『事例E：手術後に足首の動きが悪い選手がいたので、少し補助的な感じでテーピングをしています。』など、選手の状態や特性を考慮した上でテーピングを用いることが示唆された。一方、小学生群に『問：テーピングを実際に使う場面はありましたか。』と尋ねたところ『事例C：常に数種類のテーピングを準備していますけど、使ったことはないです。』と語られた。以上から、サッカースクールではテーピングの需要や必要性は低いことが予測された。

#### 5) 測定と評価

『問：測定と評価について、取り組んでいることを教えて下さい。』に対して、小学生群からはいずれも実施していない旨の語りが得られた。その要因として、前述のスポーツ外傷・障害の予防におけるメディカルチェックと同様に、測定と評価を実施するための時間や設備・用具が不足しているためであると考えられた。しかし、その中で『事例A：この子よく膝が内側に入るなど、明らかに注意が必要な動作はトレーナー間で共有したり、コーチに報告して、気を付けるようにしていました。』と語られた。以上から、客観的な評価ではないものの実際の練習中におけるプレーや動きの中から情報を収集し、スポーツ外傷・障害の予防やコンディショニングに活かすための取り組みをしていることが窺えた。

大学生群からは『事例D：周径囲測定と最大筋力の測定をトレーニングコーチと一緒にしています。』や『事例G：フィールドテストをやっていて、過去の結果と比較したり、ケガが発生した時とかりハビリの時の参考にしていますね。』と語られた。一方、筋の柔軟性や関節弛緩性など、メディカルチェックに分類される測定と評価を実施している旨の語りは得られなかった。以上から、大学生の部活動では主にトレーニングの成果やパフォーマンスを評価するための測定と評価を実施していることが示唆された。

また、小学生群と同様に大学生群からも『事例F：慢性障害が多い競技なので受傷機転というよりは、まず選手の身体とか泳ぎ方のどこに問題があるかっていうのを普段から観察するところからスタートしました。』や『事例G：リハビリの時に走り方に問題があ

ることに気付いて、選手に説明してから、そこのフォーム指導をしたことはありますね。』など、練習中のプレーや動きの中から情報を収集している様子が窺えた。以上から、サッカースクールと大学生の部活動の両活動に共通して、時間や場所を確保したうえで測定と評価を行うだけでなく、ときには実際のプレーや動きの中から必要な情報を収集し、評価する能力も必要であることが推察された。

## 6) 健康管理と組織運営

『問：健康管理として、どのような活動をしていますか。』に対して、小学生群と大学生群のいずれからも具体的な活動に関する語りは得られなかった。その要因として、小学生群ではサッカースクールそのものにおける活動時間の短さや練習時間外において各選手と関わる時間が短いためであると推察された。また、大学生群においては対象選手が多いことから競技場面以外での介入が難しいためであると予測された。ただし、新型コロナウイルス（以下、コロナ）感染症対策に関する語りが複数認められ、小学生群からは『事例C：選手がグラウンドに到着したら、口頭ですけど体調のチェックをしたり、検温はやっていました。全部、トレーナーが担当していました。』などと語られた。また、大学生群からは『事例E：まず、体温を毎日測っているのと出来るだけマスクをしてもらうことですね。他には使用したベッドとかも毎回除菌シートで拭いてっていう対策はしています。』や『事例F：試合前とかだと、水泳連盟が運営しているアプリで体調チェックをするようになっていて、それをちゃんとやるようにトレーナーからアナウンスしていました。』と語られた。以上から、コロナ禍においてはコロナ感染症対策に時間を費やしていたため、一般的な健康管理に関する具体的な語りが得られなかったのかもしれない。なお、競技者の健康管理はJSPO-ATにおける他の役割と密接に関わっており、その範疇は広く、かつ深い<sup>13)</sup>。そのため、コロナの収束後も活動現場ならびに競技者の特性に応じて、健康管理を実践するように努めることが望ましいと考えられた。

他方、トレーナー間や他のスタッフとの連携などの組織運営に関して、小学生群からは『事例B：僕が行っていたスクールには3人のトレーナーがいたので、アイシング用の氷を準備する人、その日に必要な用具を準備する人、その日の練習メニューとかケガの処置、あとは伝達事項などを報告する人、っていう感じで役割分担していました。試合や大会には帯同していない

ので、それ以外の活動は出来ていません。』と語られた。また、他のスタッフとの連携については『事例A：トレーナーがケガの評価と応急処置をした後にコーチに伝えて一緒に判断しています。』と語られた。その要因のひとつとして、トレーナーだけではなくコーチにも介入してもらおう方が、よりスムーズに選手とコミュニケーションが図られるためだと予測された。また、サッカースクールではスポーツ外傷・障害等が発生した際に保護者への説明が求められることから、コーチとの情報共有が必要なためであるとも示唆された。一方、大学生群からは『事例F：学外からのトレーナーの方が病院に勤務されているので、そこでの連携はしっかり取るようにしていますね。』や『事例D：チームドクターとヘッドトレーナーが勤めている病院に連絡をして、救急の場合は対応してもらう形になります。』など、学外のメディカルスタッフとの連携を図っている様子が窺えた。その他、『事例E：特別な申請とかはないんですけど、テーピングが減ってきたら早めにマネージャーに言っています。これだけ要るって言えば、マネージャーはすぐを買ってくれますね。』や『事例G：メディカルに関する備品で必要なものは言ってるって言われてて、その都度買ってもらってます。会計に関わることはないですけど、何かの参考になるかなと思って、使った分は記録するようにしています。』と語られた。以上から、大学生群においてはトレーナー活動を行うための準備として、メディカルスタッフ以外の他のスタッフからも協力を得ていることが示唆された。

## 7) 教育的指導

『問：教育的指導として、何か活動をされていれば教えて下さい。』に対して、小学生群からは競技活動に直接関係するような語りは得られなかった。その中で、『事例B：日常レベルの教育というか、例えば挨拶とか言葉遣いとか、そういうのは声を掛けたりすることはありました。』や、練習道具の準備・片付けおよび使用方法などに関する指導を行なっている旨の語りも得られた。小学生に対するスポーツ指導においては、スポーツ活動を通じて社会性も育むことが求められる<sup>14, 15)</sup>。以上から、サッカースクールのように小学生を対象とするケースでは、メディカル・コンディショニングに特化した指導だけではなく、ときにはいちスポーツ指導者としての指導や立ち振る舞いも求められると示唆された。

一方、大学生群においてはコンディショニングの項

に示した通り、セルフコンディショニングの指導に関する語りが複数得られた。その他、『事例D：プロテインとサプリメントはドーピング違反にならないように助言したり、トレーナーからも確認するようにしています。』や『事例F：1年に1回更新されるもの（アンチ・ドーピングにおける禁止表国際基準）を選手に送ったり、水泳部の選手・スタッフ共にドーピングのテストを水泳連盟から受けるように準備しています。』など、大学生群からのみアンチ・ドーピング活動に関する語りが得られた。

他方、小学生群への『問：子供たちへの教育として、工夫していることはありますか。』に対して、『事例C：月に1回保護者向けにトレーナー通信というものを配っていて、擦り傷とか足関節の捻挫など、子供に起きやすいケガとか、熱中症に対しての応急処置や予防・対策を載せています。他にもシューズの特性や選び方とか、年齢や発育・発達段階に合わせた運動や向上させるべき能力、栄養についても触れて作りました。』と語られた。同様にトレーナー通信について、『事例C：子供に理解してもらうにも限度があるので、保護者の方にも理解してもらいつつ、保護者と一緒にケガの予防をしてもらいたいなと思って作っています。』と語られた。以上のように、小学生群からは選手だけではなく、保護者にも働き掛けていることが明らかとなった。その要因のひとつとして、スポーツ外傷・障害の予防やコンディショニングに対する児童の理解力が十分ではない可能性があり、保護者の協力が必要であるためだと示唆された。そのため、未就学児や児童を対象にトレーナー活動を行う際は、選手ならびにチームスタッフだけではなく、保護者とも適切なコミュニケーションを図ることが有効であると示唆された。なお、このような保護者との関わりに関する語りは調査全体を通じて小学生群のみに認められた。

#### 4. 結論

本研究の目的は小学生を対象に活動するJSPO-ATの役割を検討することであった。そのため、小学生を対象としてトレーナー活動をした3名と大学生を対象としてトレーナー活動をした4名を対象に、それぞれのフィールドにおける活動内容を想起してもらったうえで、半構造化面接法によるインタビュー調査を実施した。

その結果、大学生と比較をすると小学生の方が自己管理能力が育まれていない可能性が高いため、スポー

ツ外傷・障害を予防するためのリスク管理においては、特に選手一人ひとりに対する細かな視点が求められると示唆された。また、限られた時間の中でより有効な活動を実施するためには知識や技術だけではなく、対象に応じたコミュニケーション能力が求められると予測された。そのため、トレーナー自身だけではなく、コーチや保護者などからの理解・協力を得ることが有効であると考えられた。その他、小学生においてはメディカル・コンディショニングに特化した指導だけではなく、ときにはいちスポーツ指導者としての指導や立ち振る舞いも求められることが示唆された。

本研究により、小学生を対象にトレーナー活動を実施する際の有益な示唆が得られた。しかし、本研究における対象は限定的なものであり、小学生に対するトレーナー活動を広く網羅したとは言い難い。加えて、小学生ならびに大学生それぞれにおけるトレーナー活動の頻度に差があり、この点が研究結果に影響を及ぼした可能性も考えられる。以上から、今後はさらに広く対象を設け、多くの知見を蓄積していくことが必要である。

#### 引用・参考文献

- 1) 伊藤雅充, 菊幸一, 菅原哲朗, 大橋卓生, 多賀啓 (2019): コーチングを理解しよう, Reference book, (1), 公益財団法人日本スポーツ協会, 公益財団法人日本スポーツ協会, 東京, 22.
- 2) 小林寛道, 東海林祐子, 田中喜代次, 吉村隆喜, 能瀬さやか, 高尾美穂, 広瀬統一, 来田享子, 関根正美, 勝田隆, 山下修平, 久木留毅, 和久貴洋, 水上博司, 早瀬健介, 間野義之, 石黒えみ, 三上真二 (2019): 現場・環境に応じたコーチング, Reference book, (1), 公益財団法人日本スポーツ協会, 公益財団法人日本スポーツ協会, 東京, 324-325.
- 3) スポーツ庁: 学校体育・運動部活動改革をはじめ子供のスポーツ機会の充実・体力の向上, [https://www.mext.go.jp/sports/content/20211007-spt\\_sseisaku01-000018303\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/sports/content/20211007-spt_sseisaku01-000018303_01.pdf) (参照日2024年12月30日).
- 4) 小林寛道, 東海林祐子, 田中喜代次, 吉村隆喜, 能瀬さやか, 高尾美穂, 広瀬統一, 来田享子, 関根正美, 勝田隆, 山下修平, 久木留毅, 和久貴洋, 水上博司, 早瀬健介, 間野義之, 石黒えみ, 三上真二 (2019): 現場・環境に応じたコーチング, Reference book, (1), 公益財団法人日本スポーツ協会, 公益財団法人日本スポーツ協会, 東京, 322.



- 5) 公益財団法人日本スポーツ協会(2019): アスレティックトレーナーとは, 公認アスレティックトレーナー専門科目テキスト1アスレティックトレーナーの役割, (1), 文光堂, 東京, 13,.
- 6) 鹿倉二郎(2019): アスレティックトレーナーの役割, 公認アスレティックトレーナー専門科目テキスト1アスレティックトレーナーの役割, (1), 文光堂, 東京, 35-36.
- 7) 今福輪太郎(2021): 質的研究を実施するうえで知っておきたい基本理念, 薬学教育, 5: 2020-002.
- 8) 寺下貴美(2011): 第7回質的研究方法論－質的データを科学的に分析するために－. 日本放射線技術学会雑誌, 67 (4): 413-417.
- 9) 佐藤郁哉(2005): トライアングレーション (方法的複眼) とは何か? . インターナショナルナーシングレビュー: 国際看護師協会機関誌, 28 (2): 30-36.
- 10) 鹿倉二郎(2019): アスレティックトレーナーの役割, 公認アスレティックトレーナー専門科目テキスト1アスレティックトレーナーの役割, (1), 文光堂, 東京, 38.
- 11) 黒川淳一(2016): メンタルトレーニング技法の基礎－評価技法を中心に, スポーツメンタルトレーニング教本, (3), 日本スポーツ心理学会, 大修館書店, 東京, 60.
- 12) 荒木雅信(2011): 健康スポーツ心理学, これから学ぶスポーツ心理学, (1), 大修館書店, 東京, 124-127.
- 13) 村木良博(2019): アスレティックトレーナーの役割, 公認アスレティックトレーナー専門科目テキスト1アスレティックトレーナーの役割, (1), 文光堂, 東京, 44.
- 14) 尾縣貢, 平野裕一, 岡澤祥訓, 田口素子, 松本恵, 亀井明子, 川原貴, 宮川俊平(2019): グッドコーチに求められる医・科学的知識, Reference book, (1), 公益財団法人日本スポーツ協会, 公益財団法人日本スポーツ協会, 東京, 263.
- 15) 小林寛道, 東海林祐子, 田中喜代次, 吉村隆喜, 能瀬さやか, 高尾美穂, 広瀬統一, 来田享子, 関根正美, 勝田隆, 山下修平, 久木留毅, 和久貴洋, 水上博司, 早瀬健介, 間野義之, 石黒えみ, 三上真二(2019): 現場・環境に応じたコーチング, Reference book, (1), 公益財団法人日本スポーツ協会, 公益財団法人日本スポーツ協会, 東京, 323.

Received date 2024年6月20日

Accepted date 2024年7月18日